あとがき

本リーフレットを著わすにあたって著者個人としては数多く訪れているが、川部会としては３回探訪を行った。毛馬の諸施設から大阪府高潮・津波ステーション、安治川水門、道頓堀水門の見学では、その迫力に圧倒された。渡しの探索では、今時無料運転されていることに感心した。その他、大阪天満宮、天満天神繁盛亭や市内文化施設も訪れた。その節には、本文中で述べた水門跡の人専用の「錦橋」にミニ博物館のように陶板の浮世絵が多く飾られており、感激した。今回のリーフレットの範囲は、大阪発展の縮図のような地域であり、無数の文化遺産がある。すべてを掲載できないので、筆者の印象深いもののみ紹介したことをあらためてお断りしたい。

最後に、水門等の見学には、関係者に多大なお世話になり、あらためて御礼申し上げます。

（公社）日本水環境学会関西支部川部会／福永　勲

参考文献

・安治川水門試運転動画　http://www.youtube.com/watch?v=PVZH0xjaG94
・大阪市渡船場マップ：大阪市建設局ホームページ　http://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000011244.html
・大阪府ホームページ，河川水質調査結果等　http://www.pref.osaka.jp/kankyohozen/osaka-wan/kasen-status.html
・淀川（淀川河川事務所）ホームページ　http://www.yodogawa.kkr.mlit.go.jp/know/rekisi/tanjyou.html
〔写真提供〕
・©大阪観光局（（公財）大阪観光コンベンション協会）（中之島全景）
・大阪府立中之島図書館所蔵（『浪花百景』川崎ノ渡シ月見景）
・大阪府西大阪治水事務所（津波・高潮ステーション全景）
・大阪歴史博物館（1885年の大洪水で安治川橋が流れた様子）
・国土交通省 近畿地方整備局 淀川河川事務所（淀川大堰・毛馬水門・閘門・排水機場）

既刊の紹介

・源流を行く 編　『名張川』（2013）
・おうみの川 編　『赤野井湾と流入河川』（2013）
・みやびな川 編　『白川』（2010）『鴨川・明神川』（2012）『琵琶湖疏水』（2013）
・歴史とロマンの川 編　『瀬田川・宇治川』（2010）『保津川・桂川』（2011）『芥川』（2011）『猪名川』（2013）
・なにわの川・庶民の川 編　『東横堀川・道頓堀川』（2011）『恩智川・生駒の川』（2012）『中河内の川』（2013）

〈企画編集〉（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（一社）近畿建設協会

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～〈なにわの川・庶民の川編〉
大川と大阪市内河川（Okawa）
〔発　行〕平成25年12月
〔発行者〕公益財団法人　琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15（大手前センター ビル4F）
TEL. 06(6920)3035　FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> http://www.byq.or.jp/
＊散策ブックはホームページ上で閲覧することができます＊

©BYQ, 2013　Printed in Japan

「　飲める水　遊べる水辺　次世代に　」

琵琶湖・淀川　里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～

なにわの川・庶民の川　編

大川と大阪市内河川

（Okawa）

（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構
（公社）日本水環境学会関西支部川部会
（一社）近畿建設協会

「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

（公財）琵琶湖・淀川水質保全機構と（公社）日本水環境学会関西支部川部会、（一社）近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、なにわの川・庶民の川編として、大川を中心として琵琶湖・淀川水系の最下流である大阪市内河川を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

CONTENTS

ねらい・目次

概要 …… 02

淀川大堰・毛馬水門・閘門・排水機場 …… 03

コラム１　新淀川の開削 …… 04

コラム２　大阪市内の洪水・高潮・津波対策の全体計画 …… 05

大川 …… 06

堂島川・中之島周辺 …… 08

コラム３　大川・堂島川・安治川の水質 …… 09

安治川・大阪市内河川河口域と渡し …… 11

コラム４　大阪市内河川河口域の渡し …… 14

（表紙写真／天満橋から見た大川天神橋付近）

1 概要

大阪市域は北側を神崎川、南側を大和川、西側を大阪湾に囲まれ、東側には生駒山系から諸河川が流れ出ている。その中で大阪市内の河川は、琵琶湖・淀川水系の最下流に位置し、寝屋川水系を含む諸河川からなっている。河口域には、主なものだけでも北から順に中島川、神崎川、新淀川、安治川、尻無川、木津川、住吉川、大和川がある。それらの中で、新淀川は、後述するように洪水防止を目的に琵琶湖からの流れを一気に大阪湾まで流下させるために、明治時代に新しく開削された。そして、旧来の流れは「旧淀川」と称され、通称上流側から順に大川、堂島川、安治川と呼ばれている。

これらの地域には、淀川大堰、毛馬水門、毛馬閘門、毛馬排水機場、そして大川沿いと中之島周辺の文化施設、大阪府津波・高潮ステーション、安治川水門、河口域の渡しなどがある。

大阪には今日まで220もの洪水が襲っていて、ほぼ5年に1回の割合である。種々の洪水津波高潮防止施設は、過去大阪を襲った幾多の台風、洪水、高潮等の再来に耐えられるように設計されたものである。一方、この付近には大阪の経済発展に伴って人々の営みを示す文化と歴史遺産が多く残されている。

本リーフレットでは、それらすべてを紹介できないが、筆者に印象深いものを以下に紹介したい。

大川と大阪市内河川流域図

2 淀川大堰・毛馬水門・閘門・排水機場

大阪地下鉄天神橋筋6丁目駅から天神橋筋を北上して、天神橋8丁目を右折後城北通りを東へ進むと**毛馬橋**に至るが、その直前を左折すれば**淀川大堰**、**毛馬水門**、**毛馬閘門**、**毛馬排水機場**の4施設が見える。

大阪には今日まで多くの洪水が襲っていて、その洪水防止を目的に淀川の流れを一気に大阪湾まで流下させるために、明治時代に「新淀川」が新しく開削された（詳細はコラム1）。その機能を一層発揮させるために設置されたのが、この4施設である。琵琶湖から流下した淀川は、毛馬で**新淀川**と**旧淀川**に分かれるが、その分岐点に4施設がある。位置関係は下の写真に示すとおりである。

新淀川下流左岸側から見た
淀川大堰

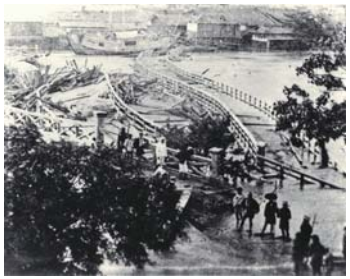
毛馬排水機場
（上方に淀川、右側に毛馬水門）

毛馬橋から見た
毛馬排水機場（左）と毛馬水門（右）

淀川大堰、毛馬水門・閘門・排水機場には、3つの役割がある。まず、①淀川大堰は新淀川を通じて直接大阪湾へ流す水量を調整し、また毛馬水門は大阪市内河川へ流す水量を調整する。さらに一津屋樋門（神崎川）や農業用水路の取水口の機能を阻害しないように、大堰・水門で淀川の水位を調節するとともに、大阪湾の塩水が淀川に遡らないようにする役割を果たす。②毛馬閘門で淀川と大川（旧淀川）に水位差があっても、パナマ運河のように船が行き来できるようにする。③大雨の時など洪水対策・高潮対策として、河口域の水門が閉じられると、大阪市内河川の水位はそのままでは上流側から流れてくる水や降雨のために上昇する。排水機場はその水位を下げるために大川の水を新淀川に排水する（詳細はコラム2参照）。

淀川大堰・毛馬水門・閘門・排水機場

排水機場の６台のポンプ


1885 年の大洪水で
安治川橋が流れた様子

淀川大堰は、可動堰で325mの長さがあり、阪急電車から見ていても大きいが、身近にみるとなかなかの迫力である。中央には55mの主ゲートが4門と両側に40mの調節ゲートが2門あってふだんはゲートが閉まっている。梅雨を前にした時期など琵琶湖からの放水量が多い時や降雨が続いて淀川の流量が多い時には、主ゲートも開いて下流に水を流す。毛馬排水機場は、排水容量が330m³/秒という大容量で、1基で55m³/秒排水できるポンプを6基備え、自家発電装置で動いている。

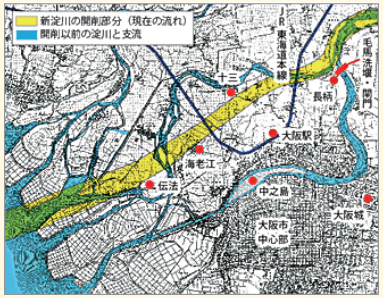
コラム 1　新淀川の開削

琵琶湖・淀川流域は、琵琶湖から河口まで古くから大雨のたびに氾濫し、洪水が頻発した。そこで、明治政府は、オランダ人技師デレーケの援助を得て、①宇治川の付け替え、②毛馬洗堰・閘門の建設、③新淀川の開削、④瀬田川の浚渫、洗堰の建設をもって、琵琶湖・淀川流域を改造しようとした。

とくに、1885（明治18）年の大洪水では多くの橋が流され、今の枚方付近から大阪湾河口まで広範囲が水浸しになり、その洪水が引くまで数ケ月もかかったと言われる。そこで、淀川中流付近から河川が一直線になるように整備するとともに、今の守口付近から大阪湾まで一気に流下させようと、毛馬の付近から旧中津川を中心に大きく開削した。

淀川開削の設計図は、右図の通りである。それ以降、淀川大堰から河口までの下流の淀川が新淀川、毛馬水門から下流が旧淀川と呼ばれ、順に大川、堂島川、安治川と呼ばれている。

ちなみに、京都から神戸へ東海道線を引いた当時は、大阪市街地の北の端が現在の大阪駅付近であり、逆Ω字型に大阪駅に寄っていた。その後新淀川を一直線に開削することになり、その結果東海道線は2回も淀川を渡ることになった。ドイツから輸入した鉄橋を事前に田畑に敷設してから、河川を開削したと言われている。



〔琵琶湖・淀川流域の改造で誕生した新しい淀川〕

現在の淀川大堰、毛馬水門・閘門・排水機場は1981（昭和56）年にできたものである。しかし、それまでの施設は、わが国の治水工事の始祖と言われる沖野忠雄の設計で、1896（明治29）年から1910（明治43）年までかけて新淀川が開削されたときに設置された。毛馬水門・閘門などの遺構の一部は産業遺産として**淀川河川公園**に残され、人々が楽しめるように開放されている。

また、毛馬水門から下流に新淀川左岸に沿って、工場水源用、水運用に中津運河が整備されていたが、他の河川と同様に水運の衰えによって、1967（昭和42）年埋め立てられた。その中津運河に架かっていた毛馬水門直下の眼鏡橋も公園内に移設されている。

産業遺産として保存されている
旧毛馬閘門

沖野忠雄の像

コラム ❷ 大阪市内の洪水・高潮・津波対策の全体計画

1965（昭和40）年以降、新しい「大阪高潮対策恒久計画」にもとづいて、各種施設が整備された。これらの施設は、過去大阪を襲った幾多の台風、洪水、高潮等の再来に耐えられるように設計されたものである。すなわち、計画高潮位をOP+2.20mとし、3mの偏差を予測して、防潮施設をOP+5.20mに耐えられるように造っている（OPとは、大阪湾の平均最低潮位をいう）。

これらの施設のうち、安治川水門、尻無川水門、木津川水門で海側からの高潮を堰止め、上流側から市内に流れてくる水は、毛馬排水機場から新淀川を通じて、一気に大阪湾へ放流している。防潮水門外ではOP+6.60mに耐えられるように堤防が造られ、水門内では、OP+4.30mとして整備されている。

大阪市内や近郊都市の浸水対策のための流量・水位調整は、城北水門、東横堀川水門、道頓堀川水門、平野川分水路排水機場などで行われる。例えば、平野川分水路排水機場は、平野川分水路と第二寝屋川の交叉するところに設けられ、上流側の水位を調整している。これらのお陰で最近20数年は、大阪市内や近郊都市で浸水現象が起きていない。

平野川分水路排水機場

長柄八幡宮

与謝蕪村公園の説明書き

大川桜宮橋付近

3 大川

毛馬水門直下流から旧淀川が始まる。この後、中之島付近までを通称**大川**と呼んでいる。大川が始まる所に毛馬橋があり、その橋を渡るとその西方に**長柄八幡宮**を見ることが出来る。同八幡宮は、1296（永仁4）年に山城国の石清水八幡宮（男山八幡宮）から神体を勧請して祀ったのが起源といわれている。近所の人々に親しまれている八幡宮だそうである。

毛馬橋下流の大川両岸は**毛馬桜之宮公園**として整備されている。また、毛馬橋のたもと東側は、**与謝蕪村公園**として整備されている。俳諧絵画で有名な与謝蕪村は、淀川と深く関係がある。淀川にかかわる俳句も多く、伏見から淀川河口までのスケッチもあり、淀川沿い各地に句碑などが残されていて、蕪村公園もそのひとつである。また左岸東側に城北川（城北運河）の水門があり、他の水門と同様に大阪市内の洪水対策の役割を担っている。

大川には多くの橋が架かっているが、それでも間隔が広いため、人々の生活には不便である。昔は、渡し船が多くあった。今日では、その代わりに人と自転車専用の橋がかけられ

ている。毛馬橋から下流の**都島橋**まで行く途中に架けられている**飛翔橋**もその一つである。この付近には、左岸側に**大阪市水道発祥之地碑**もあり、その下流には、昔源八の渡しがあった。**源八橋**、**桜宮橋**下流の川崎の渡し跡には、人と自転車専用の**川崎橋**が架かっている。いずれも上述の毛馬桜之宮公園の中にあり、付近の景色とマッチしている。

源八橋下流左岸側には大阪府「**ふれあいの水辺**」がある。対岸には、OAP（大阪アメニティーパーク）があり、帝国ホテル、マンションなどが並んでいる。「ふれあいの水辺」は、大阪府が都心部に水辺の癒しやくつろぎの空間を創出しようとして、大川沿いに砂浜やカフェデッキ、緑地をつくったものである。

大川の右岸側には、**造幣局**、**泉布観**がある。造幣局は昔ながらのシックな建築様式で、場内には、旧造幣寮鋳造所正面玄関も残されており、桜の通り抜けとともに有名である。また泉布観は、明治時代の造幣寮の迎賓館であり、コロニアル様式の建物は同時代の雰囲気を残している。

大川左岸側を下ると、**工業用水取水口**がある。さらに、その下流にはかって藤田男爵邸があった。現在では**太閤園**、**藤田美術館**、**藤田邸跡公園**、**大阪市公館**が並んでいる。上述の川崎橋、**川崎の渡し跡碑**もある。藤田男爵は明治時代の豪商で、この付近一帯に別荘を持っていた。親子二代で収集した古美術品が藤田美術館で一般公開されている。その中には、国宝（紫式部日記絵詞、曜変天目茶碗ほか7件）や重要文化財（45件）なども含まれる。広い庭園には、多くの石像美術品が置かれている。

大川には、その後左岸側に**寝屋川**が流入する。

大阪ふれあいの水辺と
大阪アメニティパークビル群

造幣局

泉布観

造幣局桜の通り抜け

藤田邸跡公園入口

川崎橋と寝屋川（右側）

中之島全景

日本銀行大阪支店前の
郵便ポストの碑

大阪市役所

中央公会堂

大阪市立東洋陶磁美術館

大阪天満宮

4 堂島川・中之島周辺

大川は、川崎橋の直後に寝屋川が流入し、間もなく**中之島**で**堂島川**と**土佐堀川**に分かれ、さらに土佐堀川から**東横堀川**が分流している。寝屋川の流入直後には**天満橋**、大川が別れたところには**天神橋**があり、さらに下流に**難波橋**がある。中之島には、役所や大企業の事務所が集まっている。そしてこの付近では、**天神祭**や市民レガッタなどの大阪の川を舞台とした行事が行われ、四季の風物詩として、市民に親しまれている。また、橋の下を通るために天井の低い、喫水の浅い観光遊覧船水上バス(アクアライナー)が、この付近を周遊し、低い目線での景観を楽しませてくれる。

中之島の御堂筋沿いに**日本銀行大阪支店**があり、その前には大阪で初めての郵便ポストがおかれたという碑が建っている。また、大阪市民270万人を代表する**市役所本庁舎**があり、さらに**大阪府立図書館**、レンガ造の**中央公会堂**がある。中央公会堂はネオ・ルネッサンス様式を基調としたバロック的なデザインで、当時最新の技術により建設されたものである。また東側には、安宅産業創始者安宅栄一氏が収集した東洋陶磁器を展示している**大阪市立東洋陶磁美術館**がある。この東洋陶磁美術館から東方および大阪市役所南側は、中之島公園と言われる。堂島川・土佐堀川河川べりは、水辺環境が整備され、人々が散歩を楽しんでいる。

堂島川右岸には、大江橋から上流に向かって**大阪高等・地方・簡易裁判所**があり、その東側には**法務省合同庁舎**、さらに少し北には**大阪天満宮**、**南天満公園**がある。

大阪天満宮の一大行事天神祭は、日本三大祭りの一つといわれ、約1000年余の古い歴史を持つ

祭りである。豊臣秀吉が大阪城を築いた頃に、祭りの様式が今日のようになった。江戸時代の絵図には、現在とほとんど同じ船渡御、花火が描かれており、浪速っ子の心意気が伝えられている。例年この祭りの頃は猛暑だが、100隻余りの船と5000発の花火、130万人の人出で賑わう。天満宮の境内には、**天満天神繁盛亭**という寄席もあり、多くの客で賑わっている。

淀屋橋南詰西側には、橋に名を残す**淀屋の屋敷跡碑**がある。さらに土佐堀通りを上流東方向へ歩くと、老舗の証券会社や大企業の事務所が軒を連ねており、北浜まで行くと、関西の株の中心地・**大阪証券取引所**がある。明治時代の息吹を感じさせる遺跡も多い。明治新政府の方針をめぐって大久保利通と木戸孝允、板垣退助などが花外楼という旅館で1875(明治8)年に会談した。現在同名の料亭の前には、**大阪会議開催の碑**がある。

天神祭

天満天神繁盛亭

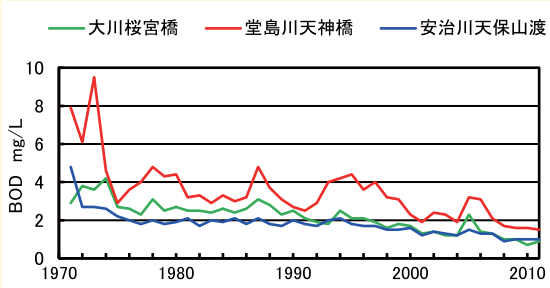
淀屋の屋敷跡碑

コラム ③ 大川・堂島川・安治川の水質

旧淀川、すなわち大川、堂島川、安治川の水質は図に示す通りで、それぞれ桜宮橋、天神橋(右)、天保山渡を定点として、古くから測定されている。大阪市内河川の中でもきれいな水質の代表地点である。

公害がもっとも激しかった1970年代はかなりの汚染状態であった。当時はまだ下水道整備が行き届かず、最悪の水質だった寝屋川の水が流入していたため、大川でもBODの年平均値が4mg/Lを超えることがあった。また堂島川でも年平均値が9mg/Lを超えることすらあった。一方、堂島川下流の安治川の水質は、大阪湾の海水の希釈効果で、大川の水質と大差のない値を示していた。

その後、下水道整備など大阪市内河川や寝屋川水系の汚濁対策の結果、3地点の水質は、現在ではB類型の水質基準(3mg/L)を満たす2mg/L未満を維持している。



適塾

大阪俵物会所跡碑

愛珠幼稚園と銅座の跡碑

大阪市役所北側に架かる水晶橋

眺めが美しかった蛸の松

土佐堀川沿いの土佐堀通りから南へ一筋入ると、江戸時代から明治時代にかけての多くの史跡が残されている。たとえば、幕末から明治にかけて大活躍した多くの志士、医学者、政治家を輩出した緒方洪庵の旧宅兼塾である**適塾**があり、現在は重要文化財に指定されている。

大阪俵物会所跡は、江戸時代の輸出品である干ナマコ、干アワビ、乾燥フカヒレの入った俵物の取引の会所であった。また、わが国で明治時代末期まで最大の輸出品目の一つであった銅の取引所を示す**銅座の跡碑**が**大阪市立愛珠幼稚園**の門前に建っている。この幼稚園は1880(明治13)年開園で、わが国で最も古い幼稚園のひとつとされる。現在の園舎も1901(明治34)年建設で、幼稚園舎では珍しく、重要文化財に指定されている。

堂島川と土佐堀川には、大阪市内の諸河川と同様に水門があり、その上には人専用の橋があった。現在水門は撤去された。人専用の橋は、現在堂島川に**水晶橋**、土佐堀川に**錦橋**が残されている。

江戸時代、中之島には諸藩の蔵屋敷が建ち並び、屋敷前には各藩自慢の松が植えられていた。人々は屋敷の白壁と川の流れに映える松の景色を楽しんだと言われる。なかでも、堂島川のほとりの久留米藩と広島藩の間の河畔の松は、枝振りが蛸の泳ぐ姿に似ていることから**蛸の松**と呼ばれる名木であった。月の夕べや雪の朝の眺めはとりわけ美しく絶賛されたと、看板にある。

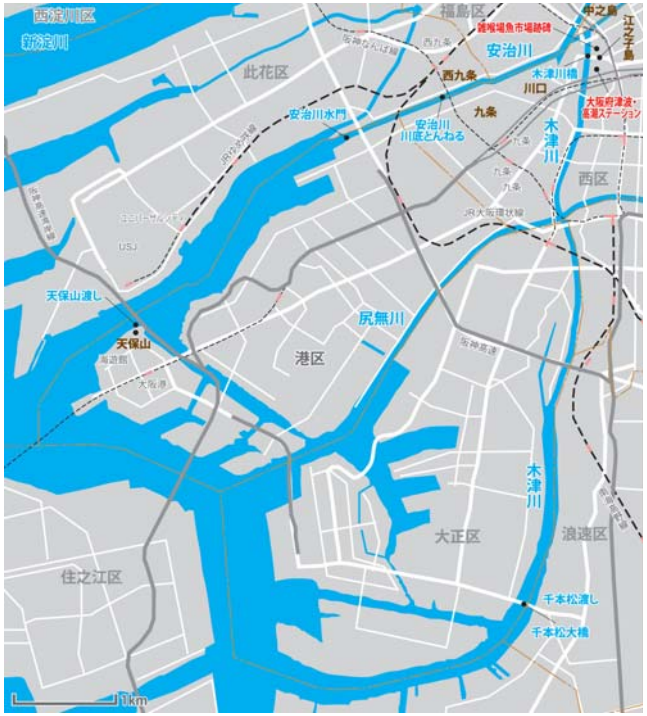
その他、この付近の堂島川、土佐堀川両岸、中之島には多くの文化施設や歴史遺産がある。

5 安治川・大阪市内河川河口域と渡し

5.1 安治川付近

堂島川と土佐堀川が再び合流して、西方へ流れるのが**安治川**であり、南方へ流れるのが**木津川**である。元々堂島川、土佐堀川の下流には九条島があり、増水した川の水がこれにぶつかってたびたび氾濫を起こしていた。そこで、江戸幕府の命で河村瑞賢により開削がなされ、1684（貞享元）年に、安治川と名付けられた。東側は**九条**、西側は**西九条**と呼ばれている。その後、富島や古川など新地開発も進められた。安治川橋は、この新地の開発に伴い初めて架設されていた。しかし、すでに述べた1885(明治18)年の大洪水で流失した後は架設されずに、人々の生活には渡しやトンネルがその役割を果たしてきた。

南方へ流れる木津川と、東側にあって現在はすでに埋め立てられている支流**百間堀川**との間には**江之子島**があった。この付近は漁船の便が良く、雑喉場（ざこば）市場と呼ばれる魚市場が開設され、大阪の三大市場の一つと言われた。その碑が**雑喉場魚市場跡碑**として残っている。



雑喉場魚市場跡碑

大阪市役所江之子島庁舎跡碑

木津川橋記念碑

大坂船手会所跡碑

川口居留地跡碑

津波・高潮ステーション全景

津波・高潮ステーションの
中之島周辺模型

大阪府安治川水門

安治川と木津川に挟まれた**川口**（かわぐち）と、市内とを結んだ橋が**木津川橋**である。その記念碑も立っている。

江之子島は、明治初期には大阪で一番発達した繁華街となった。当時は、大阪市内で一番早く市電が走ったり、日本で初めて歩道が設けられた。

大阪府庁舎や大阪市江之子島庁舎もこの付近にあり、跡碑も残っている。大阪府庁舎は1874（明治7）年に建設され、当時本格的西洋建築と言われた。先頃まで建っていた大阪府立産業技術総合研究所はその跡地に建てられた。現在は、それも取り壊されてマンションが建設されている。跡地の一部には大阪府西大阪治水事務所があり、その一角に次項で述べる**大阪府津波・高潮ステーション**がある。

大阪市創立当初、大阪市庁舎は大阪府庁舎の一部であった。その後大阪市庁舎は、1899（明治32）年に独立して江之子島庁舎となり、そして堂島庁舎に移った。

江之子島の対岸の川口には、船の集積地を示す**船手会所跡碑**、幕末から明治初期の**外国人居留地を示す跡碑**や現在も信者がミサを行うキリスト教会が建っている。

5.2 大阪府津波・高潮ステーション

土佐堀川最下流湊橋付近の阿波座には、大阪府津波・高潮ステーションがある。

ステーションには展示施設があり、一般の見学者も多く、2011年3月11日の東日本大震災以来急増したそうである。大阪市域の河口付近には海抜0m地帯が約40km²あり、108万人の人々が暮らしている。展示では、大阪を襲った台風や洪水を振り返りながら、それらを防ぐための高潮防災施設（これは津波対策でもある）の仕組みが説明されてい

る。ダイナキューブ（津波災害体感シアター）はなかなか迫力があり、津波の恐ろしさが実感される。

5.3 安治川水門

高潮防災施設の一つ、**安治川水門**は、大阪環状線の弁天町駅と西九条駅の間から安治川下流に見える。水門の径間は57.1m、閉鎖時天端高さはOP.+7.40mあり、他の多くの水門と共に、大阪湾からの高潮、津波を止める施設である。間近に見るとその大きさは、さすがに迫力がある。

5.4 大阪市内河川の渡し

大阪市内の湾岸域には河川が多く、徒歩や自転車での通行には不便なので、道路の代わりとして乗船料無料の渡しが作られている。橋がないために渡しが運航されているところもあるが、船が通過するために橋が高所に架橋されたので、付近の住民が日常生活に不便を来さないように渡しが残されているところもある。船は、対岸から出発してほんの1、2分で着き、お客を乗せて5分もしないうちに戻っていく。朝夕、特に朝は工場、学校への多くの通勤、通学客で賑わい、整然と利用されている。

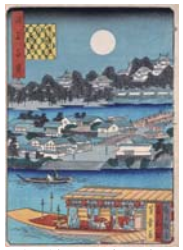
一例として、メガネ橋で有名な**千本松大橋**の下をわたる**千本松渡し**（写真）を紹介する。千本松大橋は、大きな船が通過できるように桁下36mという高いところに架橋されている。車は、木津川の岸辺をループで高くまで登って川を渡り、対岸でループで降りてくる。上空から見ればまるでメガネのようになっている。このような橋を渡るのは不便なので、人と自転車用に渡しが残っているのである。

この他、渡しでなくトンネルを掘って、随時向こう

木津川水門と渡船場

渡船風景

千本松大橋と渡船場


浮世絵：川崎の渡し

安治川トンネル

岸へ自転車ないし徒歩で渡れるようにした**安治川河底とんねる（安治川隧道）**（トンネルのことを大阪市では親しみをこめてこのように記している）もある。

5.5 安治川河口・天保山など

河村瑞賢が1684（貞享元）年開削した安治川にも上流から土砂が堆積し、船の出入りが不自由になったので、1831（天保2）年に幕府直轄で大浚渫が行われた。**天保山**は、その時の捨て土砂が盛り上げられたものである。出入り船の目印となり、いつしか人々がこれを天保山と呼ぶようになった。国土地理院から認められたれっきとした山である。標高4.5mと日本一低い山天保山にも山岳会があるらしい。そこから対岸の桜島と結んでいるのが**天保山渡し**である。この付近には海遊館、USJ（ユニバーサルスタジオジャパン）などがあり、河口には阪神高速湾岸線も渡っている。

天保山山頂銘板

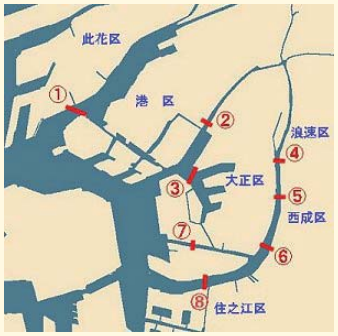
安治川河口

コラム④ 大阪市内河川河口域の渡し

北は神崎川、南は大和川にはさまれた大阪平野には古来多くの川が流れ、大阪湾に流入している。大阪の人々が高槻、尼崎、丹波などの諸国へ行くには神崎川、中津川を渡らなければならず、それらの河川には人々の往来のために渡し（渡船場）が古くから各所にあった。豊臣秀吉が朝鮮出兵の時に狩り出された渡し船もあったらしい。江戸時代には、浪速百景「川崎の渡し　月見景」などに描かれている。

これらの渡しは当初は有料であったが、1907（明治40）年に大阪市が市営事業として29渡船場を運営管理するようになり、さらに、1920（大正9）年には道路の一部として無料となった。1935（昭和10）年頃31カ所、保有船舶69隻、年間利用者約5,752万人、自転車等約1,442万台を数えた。

その後、架橋や道路整備（一部は安治川隧道のように人々と自転車だけが通れる河底とんねるもある）によって次第に廃止され、さらに戦災によって、あるいはモータリゼーションによって渡船は次第に減少してきた。その面影は、源八の渡し跡、川崎の渡し跡、平田の渡し跡などのように、遺跡として大阪市内各地に残されている。現在は図に示す8ヶ所にあり、年間利用者数は約200万人といわれている。



1. 天保山（てんぽうざん）渡船場
2. 甚兵衛（じんべえ）渡船場
3. 千歳（ちとせ）渡船場
4. 落合上（おちあいかみ）渡船場
5. 落合下（おちあいしも）渡船場
6. 千本松（せんぼんまつ）渡船場
7. 船町（ふなまち）渡船場
8. 木津川（きづがわ）渡船場